

講演

きもの文化の伝承と発信をめざした  
ゆかたの着装を含む国内・国外での授業実践

横浜国立大学教育学部教授 薩本 弥生

Experiential Classes Including Try-on Yukata to Transmit Kimono Culture to  
Home Economics Students in Japan and to People from Foreign Countries

Yayoi SATSUMOTO

1. はじめに

現在では核家族化，便利な機器の普及，家事の外部的化により生活技術を伝承する機会が減少している。また，国際化・情報化の進展によってモノの入手が容易になる中で私たちの価値観も変化し，若者の古き良きモノや自国の伝統・文化への関心が低下している。きもの文化は，染色，織，縫製，着装に関わる技術に支えられ形成してきたが，日常着が洋装化し既製服が普及した今日，家庭において和服文化に触れ，伝承される機会が減少し，若者にその内容が理解されにくくなりつつある。

一方，2006年に教育基本法が改正され，「伝統や文化を尊重し，我が国と郷土を愛するとともに，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された。この規程を受け，2008年3月の学習指導要領告示では，国際社会で活躍する日本人の育成のため，我が国の郷土の伝統や文化を受け止め，それを継承，発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。そして，中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれた。すなわち，日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育，すなわち「きもの」文化をどのように教育していくかについての検討，新しい教育デザインが必要となってきた。

また，政府の施策の元，全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり，情報のみならず，人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く，日本の文化を世界に発信する機会が増え，文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし日本の伝統文化をどのように伝えていくか，その方法についての検討も必要である。

そこで，著者は以上のような背景から「きもの」文化を取り扱う新しい教育デザインとして，2009年度から2011年に学内外5名の教員一呑山委佐子名誉教授（大妻女子大学），斉藤秀子教授（山梨県立大学），川端博子教授（埼玉大学），扇澤美千子教授（茨城キリスト教大学），堀内かおる教授（横浜国立大学）とともに文部科学省の「人文学および社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」の委託を受け，服飾文化共同研究拠点，文化ファッション研究機構より助成を得て，『きもの』文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発－『きもの』の着装を含む体験学習と海外への発信－のプロジェクト研究を行い，日本の子どもたちの心に「きもの」文化を尊重し継承・発展す



る芽を育て「きもの」文化に対する理解を深める体験型教育プログラムを開発した<sup>1)~7)</sup>。その後も、研究を継続し、これまでの7年間で、関係する中学校や高等学校の生徒を対象として、『きもの』の中で最も身近なゆかたを取り上げ、その着装方法を学び、きもの文化についての理解を深める体験型様々な授業実践事例を発表している。本稿では、著者らが2009年から継続して実施してきた研究の概要を紹介したい。

## 2. 研究の方法

授業実践後の授業実践者へのインタビューや授業前後に実施した調査結果を分析・評価し、学習プログラムの改善を行なった。具体的には、「きもの」文化に関して生徒・教師がテーマ学習や授業で活用できるようなテキスト教材、e-learningデジタル教材を作成した。また、教材や授業法の改善により実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着付けがより効率よくできるようになるか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の興味・関心の喚起に寄与したか、興味・関心に性差はあるかなどを検証していった。併行して、本教育プログラムを題材とした教員研修を行い、家庭科の授業導入への参考として紹介した。授業の実施を希望する教員には、教育内容と環境を支援した。さらに、海外の研究者と連携して協力校の選定と海外での研究授業を行い、翻訳したテキスト教材・デジタル教材、インターネ

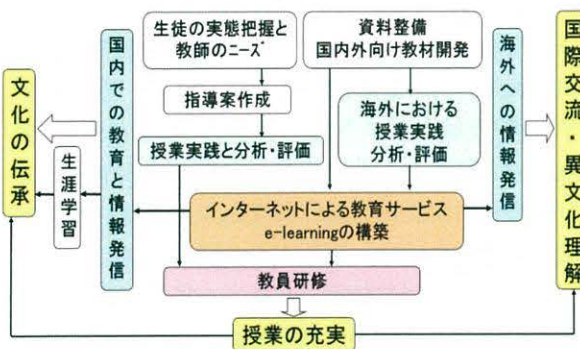


Fig.1 研究の概要

ットによるe-Learning教育環境を利用し国内同様の授業実践と分析・評価を行った。

研究の概要をFig.1に示す。

## 3. 研究の成果

### 1) 授業研究用教材としての浴衣の着装およびたたみ方のDVD作成

2009年度に大妻女子大学名誉教授の呑山氏を中心に、着装DVDの作成を実施した。同大学のビデオ収録スタジオにて男女ひとえ長着(浴衣)の着装の仕方、女子のみ、たたみ方についても撮影を実施し、日本語版、英語版ナレーションの吹きこみを行い、同年9~10月に編集を行い、男女浴衣の着装・たたみ方のDVDを完成させた(Fig.2)。



Fig.2 浴衣の着装ビデオおよび編集作業風景

### 2) 中国でのワークショップ実践用教材としての浴衣の着装・たたみ方の中国語翻訳版DVD作成

2009年度の本研究の実践が広く紹介され、中国での浴衣着装ワークショップの実践が打診されたため、2010年度には「中国での浴衣の着装ワークショップ実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献する」という目的の達成のために、ワークショップ実施に先立ち作成した日本語版DVDの中国語版作成を試みた。呑山氏の監修の元、中国語を専門とする王氏、水原氏に翻訳ナレーションを委託し、2010年7月に、ビデオ収録スタジオにおいて中国語版ナレーションの吹きこみを行い、8月に編集を行い、男女浴衣の着装・たたみ方の中国版DVDを完成させた。

### 3) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」教材の作成

「きもの」文化に関する調べ学習用の教材を作成し、生徒・教師が学べるようなテキスト教材を作成することを目標に、2009年度にプロのイラストレータに委託して男女別浴衣の着装イラストを作成し、文化服飾博物館に依頼して同館所蔵の浴衣について写真撮影を行い、浴衣生地産地や工程に関する教材作成のための取材として浴衣の伝統的な染めの技法を学ぶため浜松の「注染」染め工場および八王子の「長板中形」染め工場の見学を行うなど、準備を進めた。2010年度は、これらに加え、色、模様、染め方、歴史など、「テーマ学習」の内容を吟味し、受講年齢にあっているか、日本の伝統文化を伝えることができるか、実際の着装の仕方の図示の方法などを検討し、浴衣に焦点を絞った「テーマ学習」教材を作成した。担当は、「きもの」文化に造詣が深い共同研究者の呑山氏と齊藤氏が担当した。日本語版教材を元に2011年度には海外発信用に内容を厳選し、英語版「きもの」文化に関わる印刷教材を作成した。引用した図表・写真等はすべてオリジナルとした(Fig.3参照)。



Fig.3 英語・日本語版教材「ゆかたがわかる」表紙

### 4) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての教材のデジタル教材化

上記「テーマ学習」教材をe-learning教材として活用するため2009年度に「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切口としたホームページ制作に着手し、2010年度には2010年度に作成したDVDを元に

「着方が分かる」「たたみ方が分かる」の部分を、視聴者が視聴したいページを選択できるようにすること、ビデオから抜粋した写真やイラストレータに作成を依頼した静止画と同期させ、よりわかりやすく使い勝手が良いようにすること、日本語版、英語版に加え中国版も加えることを目標に再編成した。さらに平成2010年度末に完成した5)の「テーマ学習」教材を元に「産地が分かる」「縫い方が分かる」他、浴衣の色・柄、染め、構成、さらに応用編として平面構成の文化、着物の種類とTPOなどを盛り込んだ。2011年度には作成した英語版および中国語版の浴衣の着装およびたたみ方のDVDを元に、ホームページ上にe-learning教材としてウェブ掲載した。また、呑山氏が勤務校で作成する和裁のDVDを一部提供いただき、それを元にe-learning教材の「縫い方がわかる」の部分を完成させ、国内向けのe-learning環境の充実を図る予定である。なお、着装ビデオ他のe-learning教材は以下のサイトに掲載している。Fig.4にトップページのイメージを掲載する。

<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp>



Fig.4 e-learning web教材のトップページ

### 5) 日本での研究授業の実践

2009年度には浴衣を題材とした授業研究の一環で行った横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校において授業実践した。授業実践およびその中で実施したアンケート調査の分析結果および感想、今後の課題についての研究成果を2010年7月に日本家庭科教育学会第53回大会において「浴衣の着装を題材とした中学校技術・家庭科での授



業実践」]としてポスター発表した<sup>19)</sup>。

2010年度には2009年度の授業実践の内容を踏まえ、教育系学部所属する分担者(川端、堀内)が指導案のマスタープランを作成した。5つの協力校(千葉県立流山南高等学校、吉祥女子中等高等学校、洗足学園中学校・高等学校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校、川崎市立金程中学校)の授業担当者が各校の生徒の実態に合わせた学習指導案を作成し、授業を実施したが、その際に教材・資料の提供と授業補佐などの協力を行った。2009年度の実践を通して日本の伝統文化の伝承のための、浴衣の着装による授業の効果が見られたものの、限られた授業時間の中で効率よく着付けの技術を習得させるには、さらなる工夫が必要であることが明らかとなった。そこで、被服構成学・被服教育を専門とする分担者(川端)が関わる協力校の授業実践では、難易度の高い帯結び練習の時間を設けてから着装実習を行った。また、授業時間の多くが着装に費やされ、着装についての振り返りや、互いに浴衣姿を見合ったりする時間が充分取れなかった点については、ペア学習の手法を取り入れ着装の出来栄を相互評価すること、振り返りのために写真撮影をして着装状態を自己評価することなどの工夫を行った。さらに、授業の前後に行ったアンケート調査結果を分析し、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着装がより効率よくできるようになったか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したか、教師の意図が生徒の学びとして成果を上げているかなどを検証した。研究成果は(社)日本家政学会第63回大会(2011年6月)で発表した<sup>23)</sup>。分担者(堀内)が関わる協力校の授業実践では学習を通して、「和」の生活文化を生徒に体験させ、日本の伝統文化に親しむ機会を与え、自国の文化の独自性ととも生活様式の変化やグローバル化に対する意識を喚起させることを意図して「和」の生活文化を題材にした授業が実践された。研究成果は日本家庭科教育学会第54回大会(2010年6月)で発表した<sup>21)</sup>。

2011年度においては、2010年度の授業実践を分析・評価し、完成したテキスト教材を活用して生徒・教師がさらに学べるようにし、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着付けがより効率よくできるようになったか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したかなどを検証していった。

これまでの授業実践により、着装実習を教師一人での実践は難しいという意見がでていた。大学と附属の連携も求められており、学生に学校現場を体験させる機会ともなることから、著者が関わる協力校である附属中学校の授業実践では着装の示範や実習補助のためにアシスタントティーチャー(AT)として学生を参加させた。教員のみでの授業実践と比較して、複数のATの補助は明らかに教員にも生徒にも余裕を与え、短時間で技能を教授する上で効果的であった。授業前後のアンケートの結果を基に、技能の理解・習得を目標とする着装体験がきもの文化への興味・関心を喚起するかについて検証した。共分散構造分析の結果、「理解習得因子」から「興味関心因子」へのパス係数が有意であった。このことより「技能の理解・習得を目標に着装体験することがきもの文化への興味・関心を喚起する」という仮説が成り立つことが立証された。さらに男女による差異より、男女間のゆかたの色柄の違い・着付けの難易度の違いがある中で、男女ともにきもの文化に対する興味関心を喚起し、理解習得を肯定的にとらえさせるためには、授業のさらなる工夫の必要性が明らかになった。帯結び部分練習の有無の差異より、部分練習をすると理解習得意識が高まり、それが興味関心喚起に結びつくことがわかった。授業の様子は教育新聞社の取材を受け新聞に掲載された<sup>29)</sup>。

分担者(扇澤・川端)が関わる協力校の高等学校での授業実践では家庭科教員の配属増があり、前年度までのクラス単位の実践を改め、1年家庭総合は1クラスを2分割して履修させた。その一環で行った着装実習では前年度と比較して室内にゆとりが増し、生徒に目が行き届き、必要な場面

で個別指導が可能となり、生徒の理解度を高め、満足度も高まった。これらの実践結果および分析結果から実習で技能面の定着を図るためには教員とATの充足が効果的であることが裏付けられた。

川端氏が関わる協力校の授業実践では2010年度に取り組んだ着付け技能の評価は、目的に応じた着方、着方を通して社会生活との関わりに気づく題材にはなりうるとはいえ、両者を十分に関連づけるものではなかった。2011年度には、衣服の歴史をたどる中で和服について取り上げ、衣文化への興味・関心を高めさせるとともに、衣生活全般への視野を広げて洋服とは異なる「よさ」に気づき、自分の今後の衣生活に生かそうと工夫する態度を育み、礼儀やマナーにもつながることに気付かせることを目標に授業実践した。研究成果は協力校教員が中学校研究評議会で報告し(社)日本衣服学会第63回大会(2010年11月)で発表した<sup>24)</sup>。

以上のような「きもの」文化の伝承にかかわる授業研究<sup>8)~13)</sup>を通し、授業を受けた生徒は和服を身近に感じる機会となり、きもの文化への興味・関心が喚起され、伝統文化を尊重する芽が育まれる効果が期待できることが明らかとなった。

## 6) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての教員研修の実施

家庭科教育関係学部所属するプロジェクトメンバー(薩本・川端)が、本教育プログラムを題材とした教員研修を免許更新講習と認定講習の中で2010年度、2011年度に実施し、家庭科の授業導入への参考として紹介した。講習時にアンケートを実施し、その結果を解析し、授業実践報告書の中に成果をまとめた。また、授業の実施を希望する教員には、教育内容と資料提供面から個別に支援した。筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部の家庭科教員はプロジェクトのDVDに字幕をつけ学校用にアレンジして授業実践を行った。

全日本技術・家庭科研究会の実施した中学校技術・家庭科に関する全国アンケート調査(2012年度)<sup>14)</sup>によると、「和装の着装の実習」は、12%

程度の実施となっており、家庭科の授業実践の中で実際に着用するという指導はあまり広がっていない実態が明らかとなっている。そこで大矢ら<sup>15)</sup>は著者らのこれらの浴衣の着装を含む教員研修時に行ったアンケート調査を解析し、以下のことを明らかにした。ゆかたの着装体験を含む授業実践はTAや設備の準備の大変さは確かにハードルではあるが保護者や地域の人材等のサポート等で対策が可能であり、教師の実践意欲のためには、教師の着装技能やきもの文化への知識等への自信を高めるために教員研修等を充実させること、家庭科で実施する有用性を教師の理解がより重要である。

## 7) 海外への「きもの」文化発信のための教育プログラム開発のための浴衣着装ワークショップ

これまで海外でワークショップを実践した海外

Table1 海外でのワークショップ先一覧

2009年	・英国のLoughboroughで現地の大学生および社会人対象 ・日本人会関係者とLoughborough大学Design&Technology Departmentの大学院生
2010年	・中国の上海で社会人対象:上海領事館主催で日本文化サロン「人文雅集-益田屋」にて ・英国のBurton on Trentで中学生対象に実施:Blessed Robert Sutton Schoolにて
2011年	・英国のLoughboroughで大学生(大学院生)対象 ・英国のBurton on Trentで中学生対象に実施:Blessed Robert Sutton Schoolにて
2012年	・米国のSan Franciscoで大学生対象 ・米国のSan Franciscoで高校生・中学生対象
2013年	・米国のPortlandで高校生・中学生の日本語のクラス履修者対象
2014年	・英国のSydneyで日本語のクラス履修の高校生および大学生対象
2015年	・英国のヘルシンキとヨウツェン、オウルで大学生、一般人、専門学校生、小中学生対象

の受け入れ先をTable1に示す。

第1回目として2009年度に著者と斉藤氏が英国のラフバラにて日本人会とラフバラ大学の共同研究者Zanker氏(Design & Technology Department)の協力により、現地の大学生および社会人対象に浴衣着装のワークショップを実施した(Fig.5)。その研究成果は2010年10月に日本衣服学会第62回年次大会において『きもの』文化の海外発信をめざしたイギリスでの浴衣着装ワークショップとして口頭発表した<sup>20)</sup>。





Fig.5 英国ラフバラでの初回ワークショップ

第2回目として2010年度に著者と斉藤氏がイギリスでの中学生対象のゆかた着装ワークショップを実施した (Fig.6)。



Fig.6 英国でのWSの様子 (2010年度)

大学のHPの以下のサイトに紹介された。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/1195/detail.html>

2009, 2010 年における英国での浴衣ワークショップの内容は日本衣服学会誌 Vol.54, No.2, 105-106 (2011) に海外レポート「英国でのゆかた着装ワークショップ」として掲載された<sup>4)</sup>。

同年度に第3回目として呑山氏、斉藤氏、川端氏およびTAの学生が中国上海在住の学生と社会人を対象にした「きもの」文化に関するゆかたワークショップを実施した。

冒頭、呑山氏が「人文雅集—益田屋」代表・邵陽氏の通訳を交えて、きもの歴史と文化に関する講演を行った。その後、男女別に中国語版のDVDを上映し、浴衣の着方を学び、着付けの補

助の元、参加者が浴衣を実際に着装した (Fig.7)。



Fig.7 中国上海でのワークショップ

研究成果は(社)日本家政学会第63回大会で平成23年6月に学会発表した<sup>12)</sup>。なお、上海での着装WSの様子は、以下の2大学のホームページに紹介された。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/1085/detail.html> (横浜国立大)

<http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/university/news/2010/2010-1004-1641-4.html> (大妻女子大)

第4回目として2011年度に著者と斉藤氏、川端氏および学生9名の総勢11名でイギリスの中学生と大学生を対象にゆかた着装ワークショップを実践した (Fig.8)。



Fig.8 英国の中学大学でWS (2011年度)

第5回目は著者と斉藤氏、川端氏と学生ら総勢19名で米国サンフランシスコにてきもの紹介の講義と、ゆかたの着装ワークショップを行った (Fig.9)。詳細はHP「ゆかた着装WS in SF」に掲載された。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/8446/detail.html>



Fig.9 米国SFでのワークショップ

2013年度に、第6回目として著者と斉藤氏、川端氏、扇澤氏、阿部氏、佐原氏および学生2名の計8名で米国のポートランドに赴き、現地の学校4校 (Sheridan Japanese School, Grant High School, International School of Beaverton, Valley Catholic High School) の日本語履修の生徒を対象にゆかたの着装WSを行った (Fig.10)。

本学HPで以下のサイトで紹介された。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/10447/detail.html>



Fig.10 米国ポートランドでのワークショップ

2013年度にはさらに第7回目として著者と斉藤氏、川端氏、扇澤氏および学生ら5名と他1名の計10名でオーストラリアのシドニーに赴き、University of New South Wales (UNSW), シドニー工科大学University of Technology Sydney (UTS) および高校Sydney Girls' High Schoolで男女合わせて80着超のゆかた・小物と振袖・留袖・羽織袴を持参し、ゆかた着装WSを開催した (Fig.11)。これまでの講義内容を踏まえ、ゆかた

のみならず、振袖、留袖などの女性用の正装用のきものや男性の正装用の羽織・袴を着装したモデルに登場してもらいながら、きものに描かれた伝統的模様とその意味、また、きものから読み取れる日本人の感性・心に関して解説するプログラムを本学・著者の研究室の大学院生 (福田) を中心に企画し、参加メンバー全員の協力を得て実践した。これらの実践内容は日本の伝統文化の海外発信や国際交流にとっても貢献する内容となったと考えている。ワークショップの詳細は本学の以下のサイトに紹介された。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/13345/detail.html>



Fig.11 豪国シドニーでのワークショップ

2015年度に、第8回目として著者と川端氏および学生4名の計6名でフィンランドのヘルシンキ、ヨウツェノ、オウルに赴いた。ヘルシンキでは在ヘルシンキ日本国大使館および大使公邸とヨウツェノ・オピスト (成人学校) で、オウルではオウル大学とオウルインターナショナルスクールの全部で5か所にて男女合わせておよそ190人を対象にWSを実施した (Fig.12)。

対象者は、ヘルシンキ日本国大使館では一般募集、大使公邸においてはInternational Women's Club, Helsinkiの外交夫人、ヨウツェノ・オピスト、オウル大学では現地の学生、インターナショナルスクールでは小中学生であった。本学のHPの以下のサイトに紹介された。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/14727/detail.html>





Fig.12 フィンランドでのワークショップの様子 (ヨーツェノの成人学校にて)

以上、グローバル化に対応し、きもの文化の海外発信をめざして海外の中学生、高校生、大学生、一般人などを対象にゆかたの着装を核とする授業実践を行ってきた。また、実践時のアンケート調査を元に浴衣の着装を含む体験的授業実践が海外の参加者にどのような効果を及ぼすか、日本理解と文化交流の促進に貢献するのか、研究室の学生たちが卒論、修論で検証を行ってきた<sup>16,17)</sup>。

2010年の英国、2012年の米国の実践で同様の校種である中学生対象のWSの前後に行ったアンケート調査の結果を比較し、WSがきもの文化の発信に及ぼす効果を検証することを目的とした。日本の現代文化では海外の生徒もマンガやアニメなどで認知度が高く、情報源ではインターネットが最も高く、関心が高く自ら調べている生徒が多いことが示唆されたが、伝統文化になると、寿司、きもの、空手の認知度が多かったが、華道、茶道は、あまり、知られていなかった。また、伝統文化の情報源としては「TV」と並んで「学校」と答える人が多く、伝統文化の伝承に関する学校の役割の大きさが示唆される結果となった。

事後アンケートの結果をもとに因子分析を行い、因子を抽出したところ、両校とも高揚感、興味関心意欲、理解習得、拘束立振舞いの4因子が抽出された。それらの因子を元にパス解析を行った。英国での実践では高揚感から興味関心へのパスが有意であったが、理解習得から興味関心へのパスは有意でなかった。一方、米国での実践では高揚

感から興味関心へのパスが有意ではなく、理解習得意識から興味・関心に有意なパスが影響しているという結果が得られた<sup>16)</sup>。WSの内容が充実するにつれ、海外の人たちでも着装体験で高揚感が高まることから、きもの文化への興味が高まること、さらに自国の文化の発信意欲が高まることも明らかとなった<sup>17)</sup>。

以上、海外でのゆかたの着装を含む体験的ワークショップ実践やアンケート調査の結果を通して日本理解と文化交流の促進に貢献することが期待される。

#### 4. まとめ

著者らが実施してきた「きもの」文化の伝承にかかわる授業研究を通し、授業を受けた生徒は和服を身近に感じる機会となり、きもの文化への興味・関心が喚起され、伝統文化を尊重する芽が育まれる効果が期待できることが明らかとなった。日本の伝統文化の一つであるきもの文化のすばらしさや奥深さを感じさせるための方法として、日常の家庭科の授業で教師一人でも実践可能な教材開発を著者の研究室の院生であった福田氏が開発し<sup>18)</sup>、その効果を修論にまとめた。客観的な効果の解析は別の機会に譲るとして、授業を観察していると生徒たちにきもの文化への関心を高める良い教材となったと実感していた。そこで、本学会の主な会員である中学校・高等学校の家庭科を担当されている先生方に実際に体験いただき、現場での授業実践の可能性を感じていただけたらと思います。講演の後半で福田氏が開発した教材を用いたワークショップを福田氏が実践する機会をいただいた。

この場を借りて、お貴重な機会を与えていただいたことに、感謝の意を表したい。

プロジェクトとしては今後も、プログラムを改良しながら、息長くきもの文化を国内外に発信していく計画である。

#### 文 献

1. 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千

子、斉藤秀子、呑山委佐子、「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー、服飾文化共同研究報告 2009, 90-95 (2009)

2. 薩本弥生、「きもの」文化の伝承と海外発信をめざすプロジェクト研究をめぐって、大修館書店大修館書店、家庭科通信 43 号 Vol.15 No.3, 3-9 (2010.10)
3. 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斉藤秀子、呑山委佐子、「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー、服飾文化共同研究報告 2010, 18-23 (2010)
4. 薩本弥生、海外リポート「英国での浴衣着装ワークショップ」、日本衣服学会 Vol.54, No.2, 105-106 (2011)
5. 薩本弥生、ゼミ紹介「きもの」文化の伝承と発信をめざした教育・研究活動紹介、全国家庭科教育協会、家庭科, NO.627-62 巻, 7-28 (2012) (ISSN 0910-8688)
6. 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斉藤秀子、呑山委佐子、「きもの」文化の伝承と発信をめざした授業」、服飾文化共同研究報告実践報告書、3 月(2012)
7. 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斉藤秀子、呑山委佐子、「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー、服飾文化共同研究最終報告書、5 月 (2012)
8. 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斉藤秀子、呑山委佐子、「きもの」文化にかかわる教育プログラム開発の教育デザイン、横浜国立大学教育デザイン創刊号, 100-103 (2010)
9. 扇澤美千子他；ゆかたの着装を題材とする授業実践の試みー少人数制を導入した授業の効

果ー、埼玉大学紀要 教育学部, 61(2), 1-14(2012)

10. 薩本弥生他；ゆかたの着装体験を含む教育プログラム開発をめざした中学校技術・家庭科での授業実践, 日本家庭科教育学会誌, 56(1), 14-22(2013)
11. 薩本弥生他；きもの文化の伝承をめざしたゆかたの着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践ー教育学部の大學生アシスタントティーチャー(AT)を活用した試みからー、横浜国立大学 教育デザイン研究, 第 4 号, 35-44(2013)
12. 川端博子他；ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み, 日本家庭科教育学会誌, 56(2), 78-89(2013)
13. 川端博子他；文化の伝承を手がかりとする衣生活学習への試みーゆかたの着装を題材とした教育プログラムの検討ー、埼玉大学紀要 教育学部, 62(2), 67-81(2013)
14. 平成 24 年度中学校 技術・家庭科に関する全国アンケート調査 【家庭分野】  
[http://ajgika.ne.jp/doc/2013enquete\\_k.pdf](http://ajgika.ne.jp/doc/2013enquete_k.pdf)
15. 大矢幸江他、きもの文化伝承のために、ゆかた着装体験を含む教員研修が果たす役割、日本衣服学会投稿中
16. 井野真友美、きもの文化の海外発信をめざした浴衣の着装を含む授業実践とその効果の解析、2012 年度横浜国立大学教育人間科学部卒業論文, 2013
17. 徐智賛、浴衣の着装ワークショップを核とした授業実践を通して「きもの」文化を海外発信する教育プログラムの開発と検証、2015 年度横浜国立大学大学院教育学研究科修士論文, 2016
18. 福田幼子、着物文化の次世代への伝承と海外発信をめざした教育プログラムの開発、2015 年度横浜国立大学大学院教育学研究科修士論文, 2016
19. 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斉藤秀子、呑山委佐子、浴衣の着装を題材



- とした中学校技術・家庭科での授業実践，日本家庭科教育学会第53回大会，2010年7月
20. 薩本弥生，川端博子，堀内かおる，扇澤美千子，斉藤秀子，呑山委佐子，『きもの』文化の海外発信をめざしたイギリスでの浴衣着装ワークショップ，日本衣服学会第62回年次大会，2010年10月
  21. 堀内かおる，薩本弥生，川端博子，扇澤美千子，斉藤秀子，呑山委佐子，「和」の生活文化を経験する家庭分野の授業実践 中学校における浴衣の着付けを導入した試みから，日本家庭科教育学会第54回大会，2011年6月
  22. 川端博子，松井萌恵，薩本弥生，呑山委佐子，斎藤秀子，扇澤美千子，堀内かおる，ゆかたの着装を題材とした着装実習の試み，（社）日本家政学会第63回大会，2013年6月
  23. 薩本弥生，呑山委佐子，斉藤秀子，川端博子，扇澤美千子，堀内かおる，「きもの」文化の海外発信をめざした中国での浴衣着装ワークショップ，（社）日本家政学会第63回大会，2011年6月
  24. 小林由実，加藤順子，川端博子，薩本弥生，斉藤秀子，呑山委佐子，浴衣の着装を題材とする教育プログラムの提案，日本衣服学会第63回年次大会，2011年11月
  25. 文部科学省ホームページ 教育基本法資料室 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/houan.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm)
  26. 文部科学省ホームページ 新学習指導要領の基本的な考え方 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm)
  27. 文部科学省ホームページ 中学校学習指導要領解説 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chukaisetsu/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chukaisetsu/index.htm)
  28. 観光庁 訪日外国人旅行者数および日本人海外旅行者数の推移 [http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in\\_out.html](http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html)
  29. 浴衣を通して伝統文化の理解・着付け体験学習，教育新聞，第3044号3面，7月7日（2011）